

浜松市内科医会 AAS 第 2 報

一緒に耐性菌と戦って、こども達を守りましょう
薬剤耐性菌被害とアクションプランについて

こども病院 小児感染症科 荘司貴代

「耐性菌と広域抗菌薬の濫用をなんとかしてください」

2014 年に私は静岡県立こども病院(以後 静岡こども)に着任しました。耐性菌対策は採用面接で当時の瀬戸院長から命じられた最優先の要望でした。重症の病児にとって耐性菌感染症は致命的で、手術や化学療法など高次医療そのものが立ち行かなくなるからです。また他のこども病院と比べて広域抗菌薬の使用量と耐性菌の割合が高く、抗菌薬適正使用は喫緊の課題でした。

耐性菌対策は抗菌薬を必要な場合にのみ適切に使用することが重要です。抗菌薬曝露を減らすことで感受性が戻り、再び抗菌薬が効くようになるからです。静岡こどもでは2014年以降、病院全体が一丸となって抗菌薬適正使用に取り組みました。静注薬は20%、内服は25%減少し、抗菌薬コストは年間2000万円削減しました。2013年にはカルバペネム耐性緑膿菌は22%でしたが2015年には7%に減少し、カンジダや多剤耐性グラム陰性桿菌も検出されなくなりました。一方で減らない耐性菌があります。ペニシリン耐性肺炎球菌(PRSP)、ESBL 産生大腸菌、メチシリン耐性黄色ブドウ球菌(MRSA)です。これらは健康な児の皮膚・鼻腔・腸管内にも常在し、抗菌薬曝露により耐性菌のみ残存します。市中の生来健康なこども達の健康を脅かしています。

母体がESBL 産生大腸菌による絨毛膜炎で早産になり、そのまま敗血症で死亡した新生児、PRSPによる細菌性髄膜炎で発達障害・難聴を残した児、MRSAによる敗血症・骨髄炎で大腿骨が融解し歩行が期待できない乳児もいます。市中の耐性菌感染症を予防するには、市中での抗菌薬曝露を減らさなければいけません。

薬剤耐性菌は AntiMicrobial Resistance 略して AMR と呼ばれます。2011 年に WHO は AMR の被害拡大を「No action today, no cure tomorrow」と警告を出しました。何も対策を取らない場合、2050 年には AMR による死亡者は悪性腫瘍による死亡を上回ると予測しています。全世界的に AMR が拡大している一方で、新規抗菌薬開発は滞り、世界は抗菌薬がない時代に逆戻りしています。

先進国を中心に 2000 年以降、政府主導で AMR 対策が行われ、我が国は 2016 年 4 月に「AMR 対策アクションプラン」を発表しました。アクションプランでは日本では

PRSP・MRSA が他国よりも多いと指摘しています。抗菌薬総使用総量は欧米先進国と比較して多いわけではありません。しかし9割が経口抗菌薬で、毎日 200 万人（人口の 1.5%）に外来処方されています。特にセフェム・マクロライド・キノロン剤など経口広域抗菌薬が 8 割を占めます。疾患発生頻度から、自然治癒する風邪・気管支炎・感染性腸炎に対して処方されていると推測されています。

厚生労働省は2020年までに経口セフェム・マクロライド・キノロン剤の処方50%削減することを到達目標としています。患者満足度を維持しながら、安全に抗菌薬処方を減らすため、政府主導のガイドライン「抗菌薬適正使用の手引」を発表しました。「風邪と胃腸炎に抗菌薬を処方しない」方針を主軸とし、具体的な患者説明について明記されています。

2050 年には今年生まれた赤ちゃんが 33 歳で、すぐにやってくる未来です。それまでに耐性菌に打ち勝つには、医師会、浜松市内科医会の先生方の協力が絶対に必要です。人類共通の財産である抗菌薬を彼らの将来に残しましょう。今後 AMR アクションプランの動向、上手な抗菌薬の使い方を紹介し、抗菌薬適正使用の勉強会のご案内をさせていただきたいと思えます。

参考:厚生労働省 HP 薬剤耐性(AMR)対策 アクションプラン

<http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000120172.html>

抗微生物薬適正使用の手引き第 1 版

<http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-10900000-Kenkoukyoku/0000166612.pdf>

Muraki Y et.al Japanese antimicrobial consumption surveillance: First report on oral and parenteral antimicrobial consumption in Japan (2009-2013). J Glob Antimicrob Resist. 2016;7:19-23.